

第14回看護・リハビリテーション研究会を開催しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



2020年9月2日（水）、新型コロナウイルスの影響により延期していた「健育会グループ 第14回看護・リハビリテーション研究会」を開催しました。今回は、感染防止の観点からWEB会議形式で開催するという健育会グループ内の学会としては初の試みです。同学会には、インターネットを通じてグループの全病院・施設から計207人の職員が参加。各研究チームの代表者が、1年を通じて行った研究の成果を発表しました。

看護・リハビリテーション研究会は、「医療専門職は、論理的思考・統計的な視点を身に付けた科学者であるべき」という考えに基づき始まりました。質の高い医療を継続的に提供するために、各病院・施設の看護職と介護職が、それぞれチーム単位で研究テーマを選定。その成果を学会形式で発表します。例年は3月上旬の開催でしたが、今年は健育会本部とグループの全病院・施設をインターネットでつなぎ、WEB会議で行いました。

Vol.219でもお伝えしたようにメディカルディレクター会議は、8月に東京エリア以外の病院とはインターネットを介して実施しましたが、学会をWEB会議形式で行うのは初めて。わずかに映像の乱れなどがあったものの、大きなトラブルはなくおおむね順調に進行しました。会の冒頭では、宇都宮啓副理事長から下記のあいさつがありました。



私は昨年着任したばかりで、看護・リハビリテーション研究会は今回が初めてになります。これまでに医師研修会やTQM活動発表セミナーに出席しており、健育会は皆さんの継続的な研究成果の積み重ねで、日頃の業務が行われていると感じています。抄録をざっと読んだところ、フォローアップ研究と呼べるものがいくつかありました。フォローアップの内容は、大きく分けると二つあると思います。一つは、今までの研究の成果を踏まえて、更にもう一步研究を進めるというもの。もう一つは、前回の研究がうまくいかなかったため、異なるアプローチで取り組んでみるものです。いずれにしても、研究結果を放置するのではなく、それを生かして次に進むという姿勢は非常に大事だと思います。

研究のきっかけは、「なぜこうなるのだろう?」「どうすればうまくいくのか?」といった疑問だと思っています。どちらも、日常の業務における課題を解決するための研究です。そうした皆さんの研究成果が、業務の改善につながることを期待しています。また、他のチームの発表を聞き、お互いに刺激し合い切磋琢磨することで、今年の健育会のビジョンであるOne Teamの実現につながると考えています。

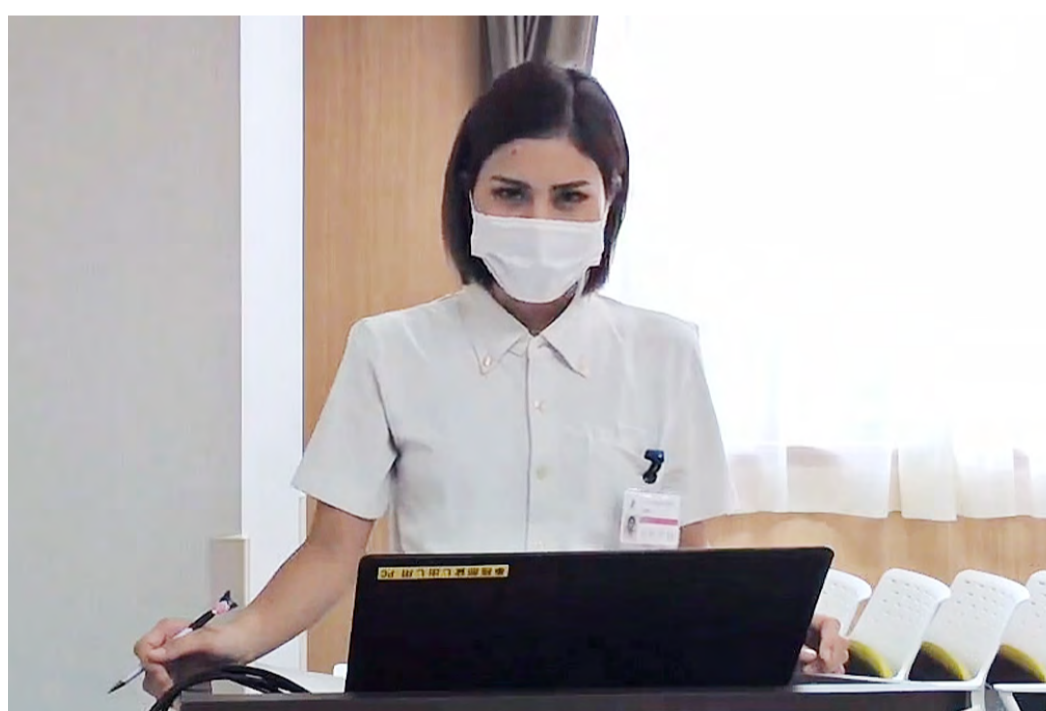


例年はゲストに有識者をお招きして開会のあいさつ後に特別講演を賜っていますが、今回はすぐに研究発表に移りました。発表数は、前半に看護部門8演題、後半にリハビリテーション部門8演題の計16演題。両部門共に1演題につき発表7分、質疑応答4分で行われ、看護部門の座長及び研究テーマは下記の通りです。

看護部門 研究発表

座長：横浜市立大学 医学部看護学科老年看護学 教授 叶谷由佳先生

1	昆布水を使用した口腔ケアの有用性の検証 竹川病院 柳下亜弥
2	障害高齢者の日常生活自立度ランクB患者における褥瘡発生因子と褥瘡発生リスクの高い患者の抽出 花川病院 福田真生
3	同僚関係がチームワークに与える影響 ～対看護スタッフ看護コミュニケーションスキル尺度(CSN1)を用いて～ いわき湯本病院 薄井智美
4	医療療養病棟看護職・介護職のグリーフの実態とグリーフケア学習による終末期ケアに対する意識変化 熱川温泉病院 星指菜摘
5	「笑い」と療養病棟で働く看護・介護職のストレスと対人コミュニケーションの関連 石巻健育会病院 長谷部和枝
6	舌圧とBerg Balance Scale (BBS) に関する指標の検証とBBS向上プログラム導入における効果と影響 ねりま健育会病院 大田花鈴
7	プリセプターの実態と社会人基礎力の関連 西伊豆健育会病院 柴崎智恵
8	チーム・コンピテンシーの向上 看護師の得意分野、看護業務を共通認識し教えあう中でのチーム・コンピテンシー 湘南慶育病院 渡部直美



看護部門の全演題の発表終了後、座長の叶谷教授から全体に関して下記の講評をいただきました。さらに「どう説明すればブラッシュアップできるか」「論文にする場合にこの内容を加えたほうが良い」という視点から、1題ごとに丁寧なコメントもいただきました。

私は、「1年掛けてクリニカルクエストからリサーチクエストに」というプロセスを、皆さんにお伝えしてきました。その中でも一番大事なのは、現場でのクリニカルクエストだと思います。やはりそれは、現場の人にしか浮かばないアイデアだからです。そこに私も関わることで、現場で何が起きているのか、患者さんのニーズは何かということ、新鮮な思いで学ぶことができました。このような機会をいただいたことは私自身にとっても良い経験になり、理事長をはじめ健育会グループの皆さんには本当に感謝申し上げます。

今年は開催できないかもしないと思っていましたが、皆さんの努力と工夫によって、こうして開催できたことは大変貴重な機会になったと思います。発表の場で何が一番重要かという、質問を受けることです。質問によって、説明の仕方や自分達の研究にどういった意義があるのかということを知ることができます。皆さんは、ずいぶん成熟してグループ外で発表することが当たり前になっています。グループ外で発表するときは、今回受けた質問を糧にしてほしいと思います。



叶谷教授の講評の後、約10分間の休憩を挟んで、後半のリハビリテーション部門の発表が行われました。リハビリテーション部門の座長と各研究テーマは下記になります。

リハビリテーション部門 研究発表

座長：竹川病院 リハビリテーション部 可児利明部長

9

東京都フェンシング協会主催大会におけるメディカルサポート
- 種目別の外傷・障害分布の検討 -

竹川病院 北田利弘

10

片麻痺患者に対するReoGo(R) - J使用による即時効果

花川病院 小島圭祐

11

入院患者における主観的なQOLアセスメント法の検討

いわき湯本病院 稲田芽依

12

病棟内移乗自立度変更におけるセラピストが基準としている評価について
～CSポートフォリオ分析を用いた検討～

熱川温泉病院 石井喬之

13

当院回復期リハビリテーション病棟における入院患者の在院日数に影響を与える要因の検討

石巻健育会病院 高橋夢子

14

当院回復期で長下肢装具を作成した脳卒中者の歩行能力の調査
- 介助の有無の比較 -

ねりま健育会病院 佐藤舞

15

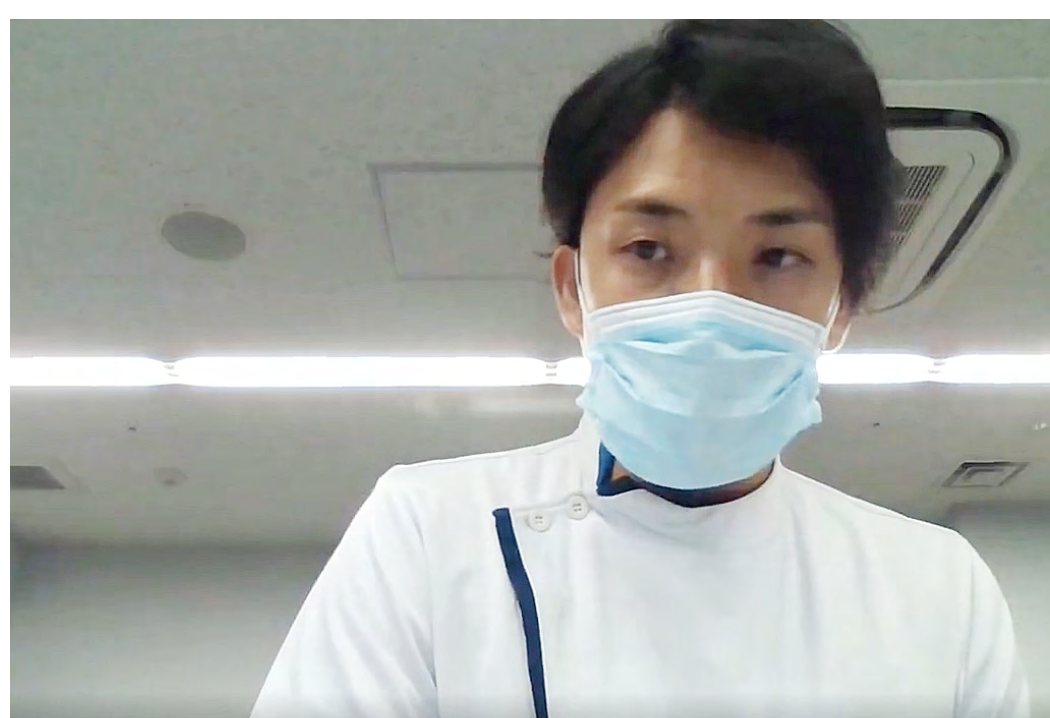
当院地域包括ケア病棟から自宅退院をした高齢独居患者の特性

西伊豆健育会病院 加藤耕一

16

ストレッチと低周波刺激の同時付与がハムストリングスに与える影響

湘南慶育病院 中尾暁人



リハビリテーション部門の全演題の発表後も、座長の可児部長から全体に関する下記の講評と1題ごとのコメントがありました。各チームは、ぜひ今後の研究に生かしてください。

グループが拡大し、病院・施設の数が増えました。残念ながら病院・施設間の質に差が出来つつあるという印象があり、今後の課題です。大学院卒や博士号を取得したリハ職のスタッフが、各病院・施設に在籍するようになっています。ぜひこうした人材を活用して、彼らが高い次元で学んだことをグループ内で共有できるといいと思っています。今まではグループ内に距離の問題もありましたが、今回WEB会議形式で開催して上手くいったので、一つ解決しました。東日本に広く分布するグループ法人の教育についてもリモートで実施するという可能性を示すことができ、次の発展につながると感じています。

現在、色々なことが制限されており、今まで通りというわけにはいきません。しかし、そうした状況でも患者さんのために最善を尽くすのが、リハビリテーションの精神です。不自由な時代だからこそ、リハ職の皆さんには活躍できるチャンスが増えていると思います。ぜひ、それぞれの病院・施設で、力を発揮してください。今回は、こうした状況でも学ぶことを止めないという健育会の姿勢を、対外的にも示すことができた良い学会になったはずです。



最後は、私が下記の閉会のあいさつをして締めくくりました。

健育会の初めての大きな WEB 学会ということで上手くいか心配していましたが、無事に終えることができました。今回に限らず、健育会グループの看護とリハビリテーションのレベルは上がっていると感じています。やはりグループの全員が、研究しよう、頑張ろうという姿勢で日々の業務に臨み、我々の諦めないという気持ちが患者さんにも伝わっているのではないかと思います。

私は、皆さんの研究が他の学会で高く評価されることも大事ですが、患者さんやそのご家族に「こんなに良くなりました」と言っていただくことが、我々医療職の誇りだと思っています。そのために日々研鑽、研修を重ね、もっと良くなるのではないかとことを探求して、14年間研究会を続けてきたのです。

今後も看護やリハビリテーションに関する新しい医療機器に関しては、積極的に投資していきます。健育会が新しい機器を導入して、結果を出していくことが大事です。研究とは、こうしたらこうなるだろうという仮説を立て、検証するものであり、我々の研究会はその域に達してきています。

また、医師ができることにも限界がありますので、それをカバーする看護とリハビリテーションはとても大切です。本当に皆さん頑張っていると思いますが、健育会の看護とリハビリテーションがどの医療法人にも負けない最高のレベルになるために、もう少し頑張って更に上を目指してください。



健育会の学習・研究意欲の高さは、グループ外からも高い評価を得ており、健育会の大きな強みの一つになっています。コロナ禍という逆境にもかかわらず、WEB会議形式という新しい試みの下、こうして看護・リハビリテーション研究会を開催できたことは、本当に良かったと思います。今後もグループ内外を問わずさまざまな学会に参加し、健育会全体の医療の質を高めて一人でも多くの患者さんを救えるように努めてください。それが、私たちの社会的使命を果たすことであり、存在意義を高めることにもつながります。看護職や介護職だけでなく健育会の全ての職員が絶えず研鑽を積み、引き続き健育会を支えてくれることを期待しています。

